

いそつぶ物語

其卅七 熊と二人の友人

二人の友達が、山中を運れて通つて居ると、忽ち大きな熊が道の真中に顯はれて來ました。すると一人は、いまなり側の木の上にかき上つて、枝に隠れました。も一人は、とても逃げられぬと知つたので、すぐ地面へ打ち倒れて、息をはづませて靜にして死人の様に、ぢつとして居ました。熊は側まで來て、此人の息を嗅いで見て、死人たと思つて、食べようともしないで、どこかへ行つてしまいましたが、死肉を食はないのが熊のくせだそうです。さて熊の姿が全く見えなくなつた所で、一人は木から下りて來て、戯れに、問ひました。

『熊は君に何といつて耳語て居たかね』

すると 友達はこう答へました。

『さうさ、熊は僕にこういつたよ、危い目に遭つた時、其友を見捨てる様な人とは、必らず一所に連れ立つものでない』

不運は友情の試金石なり

其卅八 尾を失した狐

一匹の狐が、陥穽にかゝつて逃げた事は、逃げたが、其代り尻尾を取られた、どうも自分ばかり、尾なしに居るのは、何だか見つともないし、可笑なものだと、いろ／＼苦心して考へた後で、よしよし、夫では皆の狐共に尾を切らせよう、すれば誰も彼も尾なしになるから、己一人笑はれる氣遣なしたと思案して、或日のこと、澤山な狐を、よび集めて、皆に尾を切つて仕舞ふことを忠告しました。『どうも、尾がない方が、形が見よい様だし

其に第一、あのふさくした尾の重さがなくなる
これは、全く餘計なものだからなわ』など、いつ
て居ると、一匹の狐が、言ひますには、『然し、君
が自分で尾を無しさへせねば、僕等に其んな相談
はしないのでしよう』

其卅九 獅子の戀

一匹の獅子が、樵夫の娘をお嫁にくれといつて來
ました。お父つあんは、無論獅子などに娘をやり
たくはありませせん、が、夫かといつて、やらない
と言ふのも恐いし、どうしたらいいかと考へて、
やうく其計略を見つけました。先づ獅子に、た
つた一つ此方の言ふ事を聞いてくれ、ば、喜んで
娘の婿さんにしませうといひました、其一つとい
ふのは、娘は、獅子の齒と爪とが大嫌ひだといふ
から、どうか、其おわたの齒と爪とを取つて、し

まつて下さいといつたのです、そこで獅子は、自
分の好きなお嫁さんが貰へることだと思つて、な
わに此位の事ならといつて、早速其齒と爪とを切
つて仕舞つて、さて、約束通りにしたから、娘を
下さいと申し出た所が、今度は樵夫は、もう恐く
はありませんから、いきなり太い棒を持つて來て
森の方へ逐つ拂つてやりましたとさ。

お笑ひの種

三河境川水邊

近藤とき子

或る寺に三人の小僧がありました。三人とも仲々
伶俐者でしたから、和尚も未頼母しく想ひ喜んで
居られます。或日の事、檀家それがしから牡丹餅
を九つ貰ひましたから、直ぐ和尚は、小僧を膝近
く呼びよせ、小僧や、今檀家の内からこんな珍ら